

氏名	永野 いつ香	助成金額	25万円
連絡先など	dw05102@yahoo.co.jp		
助成のテーマ	水俣市茂道の歴史的形成過程水俣病発生前後の住民の生活		

【調査研究の概要】

1956年5月1日に水俣病が公式に確認されてから62年を迎えました。当時、20代だった方は80代になりました。水俣病の経験を後世に残すための時間は限られています。

本研究では、水俣病患者が多発した「茂道」という漁村で聞き取り調査を行いました。今回は、元漁師のご夫妻と、元・第21海軍航空廠袋補給工場跡地の住民から、「戦前から昭和30年代の茂道の生活状況」と「個人の生活史」について話を伺いました。「水俣地図(1960)」と住民の証言から、昭和30年代半ばには少なくとも117世帯が住んでいたことがわかりました。家系図と、選挙人名簿を照らし合わせて人口を確認する予定です。昭和7年から流し続けた水銀は住民の生活に深刻な影響を及ぼしました。昭和20年代から原因不明で亡くなる人や海難事故で亡くなる人が現れました。昭和20年代後半から、飼い猫や養豚が死に、昭和31～32年には、幼児5名が次々に亡くなりました。昭和30年代になると流産・死産を経験する女性が増えました。いくつもの命が消え、多くの涙が流れました。

国・熊本県・加害企業チッソが36年間流し続けたメチル水銀による影響。住民が語った水俣病の記憶を記録することが歴史の検証につながると考えます。調査で収集した証言や写真などの成果は、書籍化して公開します。

【調査研究の経過】

2017年4月 茂道対象者聞き取り（8日）、岡本達明氏講演「水俣病を生み出したチッソの技術」参加
 2017年5月 乙女塚・水俣病慰霊祭参加、資料収集、茂道対象者聞き取り（13、27日）
 2017年6月 茂道対象者からの茂道道案内（昭和30年代の航空廠跡地）、茂道対象者聞き取り（22、24日）
 2017年7月 茂道対象者からの茂道道案内（白戸海岸、茂道山他）、茂道対象者聞き取り（9、15、17、22日）、資料収集
 2017年8月 茂道対象者聞き取り（12、23、26日）
 2017年9月 茂道対象者聞き取り（2、9、16、23、30日）
 2017年10月 茂道対象者聞き取り（7、9、21、29日）
 2017年11月 茂道対象者からの茂道道案内（住んでいた航空廠跡地他）、茂道対象者聞き取り（4、11、19、26日）、資料収集
 2017年12月 茂道対象者聞き取り（3、19日）
 2018年1月 茂道対象者聞き取り（12日）
 2018年2月 調査協力者から資料収集、茂道対象者聞き取り（24日）
 2018年3月 茂道対象者聞き取り（31日）

【今後の展望など】

- ・「茂道」での聞き取り調査を継続します。
- ・2019年度を目標に、調査結果を第一次資料として書籍にします。
- ・2020年度を目標に、書籍をもとに論文を作成して日本平和学会に投稿します。

会計報告書の概要（金額単位：千円）			充当した資金の内訳		
支出費目	内 訳	支出金額	高木基金の 助成金を充当	他の助成金 等を充当	自己資金
旅費・滞在費	水俣熊本間×3回（ETC高速・ガソリン代）	10	10	0	0
	水俣東京間×2回（旅費・宿泊費）	131	76	0	55
	水俣市内移動（ガソリン代）	5	0	0	5
資料費	水俣病関係書籍	21	20	0	1
機材・備品費	ビデオ・HD・文具	64	34	0	30
印刷費	調査資料印刷費	10	10	0	0
協力者謝礼等		49	40	0	9
外部委託費	資料整理	100	60	0	40
合 計		390	250	0	140

水俣市茂道の歴史的形成過程と 水俣病発生前後の住民の生活



2018(平成30)年6月30日(土)

2017年度(第16期) 高木基金成果発表会

永野 いつ香

報告内容

水俣病患者が多発した「茂道」という漁村で聞き取り調査を行い、茂道住民データベースを作成しました。

1. 見過ごされた被害の存在を可視化する
2. 水俣市年次別人口動態(昭和25～35年)
3. 戦前から昭和30年代の茂道の生活状況
 - 1) 第21海軍航空廠袋補給工場と新たな移住者
 - 2) 漁業の変遷
 - 3) 顕在化した被害

1. 見過ごされた被害の存在を可視化する

- ・水俣病事件の歴史上、国・熊本県・加害企業チツソは「認定制度」に力点を置いてきたため、被害地域で何が起きているかについての視点は希薄であった。
- ・水俣病による身体的被害や精神的被害に加えて、認定制度の不備や差別などが複雑に絡み合い日常生活上での被害が再生産されている。公害や環境汚染が引き起こす被害を、茂道住民からの証言と既存の資料から導き出して、見過ごされた被害の存在を可視化する。そのためには、被害を被った住民しか経験しえない生活の奥深くまで聞き取ることが必要。

飯島伸子『環境問題と被害者運動』(1984)

- ・環境社会学の創設者の一人。
- ・たとえば、環境庁の刊行物には、公害認定患者数は統計的に示されるが、患者やその家族、死亡した患者の遺族が生活にいかなる影響を受け、それが患者や遺族の家庭の将来をどう規定することになっているのかなどということ示されない。被害の軽減、被害救済の基本となるのは被害実態、被害の本質の把握である。
- ・飯島は、公害被害は、①生命・健康、②包括的意味における生活、③人格、④地域環境と地域社会、の四レベルの様態から成り立つと考えた。
- ・公害被害を、数値や医学的な症状、そして判決によって示される賠償金額として捉えるのではなく、**家族や地域社会の中で生きる生活者がその生活全般の中で経験するものの総体として位置づけようとする。**

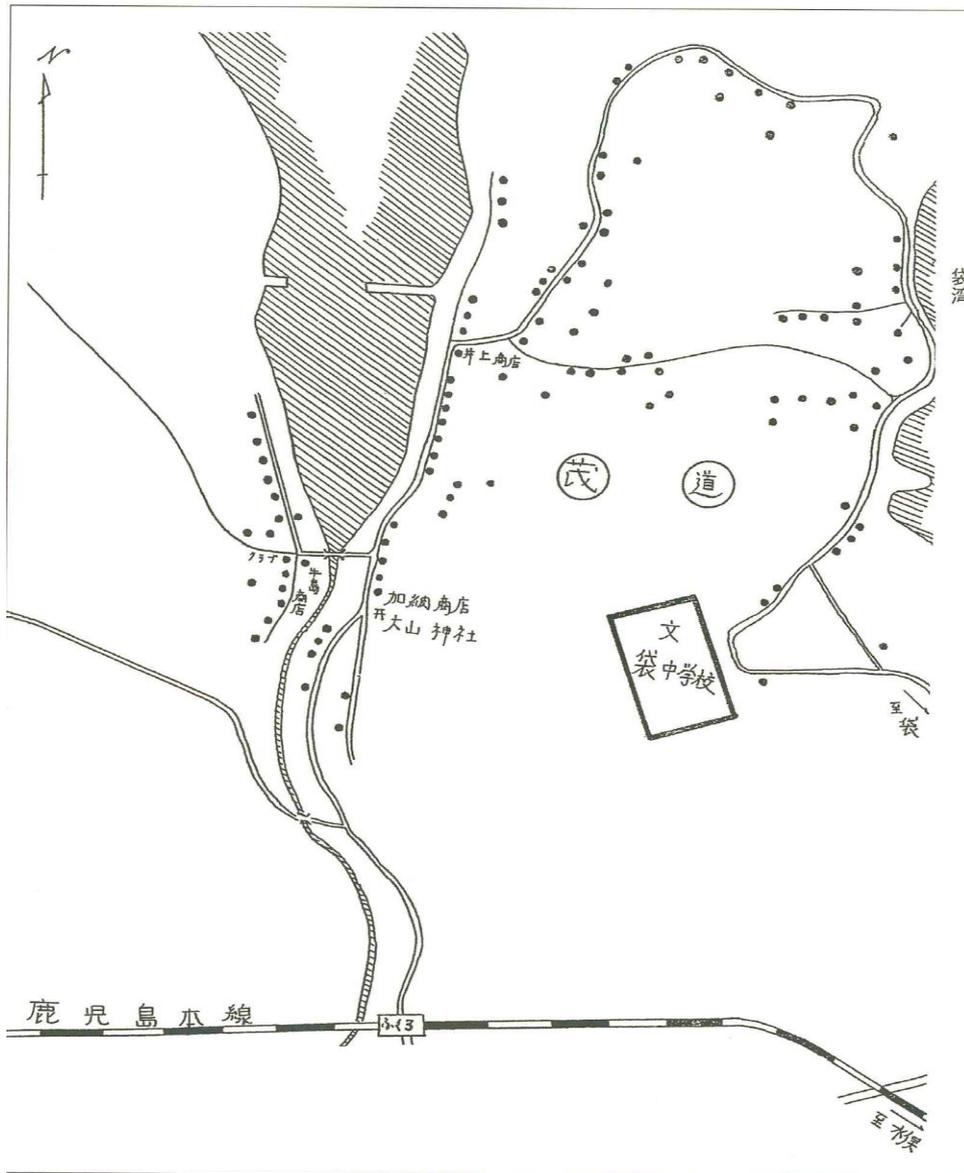
2. 水俣市:身体障害者手帳交付者と水俣病患者と年次別人口動態

年次 (昭和)	身体障害者 手帳交付者	水俣病 患者	出生	死亡	自然増	転入	転出	社会増減
25	—	—	1,450	459	991	3,334	1,835	1,499
26	62 (26年度台帳登載数)	—	1,516	394	1,122	3,536	2,602	934
27	—	—	1,294	409	885	3,592	2,833	759
28	—	1	1,287	375	912	4,376	3,410	966
29	132 (29年度台帳登載数)	12	1,060	380	680	3,452	3,330	122
30	—	9	947	317	630	3,295	2,992	303
31	—	43	1,069	388	681	2,356	2,657	△301
32	—	0	890	390	500	2,192	2,842	△650
33	271 (33年度台帳登載数)	3	929	394	535	2,108	2,664	△556
34	—	15	741	306	435	2,063	2,538	△475
35	684 (手帳交付者数合計)	4	783	305	478	2,250	3,042	△792

出典)水俣市勢要覧(昭和34、36年より抜粋)

- ・昭和30年代になると身体障害者(特に視覚障害・肢体不自由)が増え、出生数が減っている。
- ・水俣市は、「昭和32年以降は(水俣病)患者発生も漸減し、落ち着きを取り戻している」と記載。

調査研究の手法



- ・前田重雄『水俣地図』(S36)を手掛かりに、住民への聞き取り調査
- ※既存の資料を基に、世帯家系図を聞き取り、生業や暮らしぶりを記録する。
- ※了承を得られた場合のみICレコーダーとビデオに録音・録画した。
- ※裏付けとなる資料収集中。

3. 戦前から昭和30年代の茂道の生活状況

○水俣市の産業別人口 出典)昭和35.10.1国勢調査

- ・農業…………… 28.7%(5,687人)
- ・製造業…………… 22.5%(4,467人)
- ・小売業…………… 15.0%(2,974人)
- ・サービス業… 13.1%(2,609人)
- ・漁業…………… 1.0%(159人)
- ・その他…………… 19.7%(3,923人)

○元漁師のご夫妻と、第21海軍航空廠袋補給工場跡地に暮したことのある4人の、計6人にご協力いただき、戦前から昭和30年代にかけての茂道の様子と個人の生活史を伺った。聞き取り調査から明らかになった、住民の生活とメチル水銀による被害の一部を、時系列で記していく。

1) 第21海軍航空廠袋補給工場と新たな移住者



0 1000m

出典) 国土地理院地形図(S26)
「水俣127-11-7」と「出水127-12-7」

- ・戦時中、航空廠建設・道路拡張工事。
- ・建設、工事のため水俣・芦北をはじめ九州各地から「奉仕隊」が集められた。
- ・100人ほどの朝鮮人が建設作業に携わり、「朝鮮部屋」に住んだ。
- ・戦後、貯蔵爆弾と新管は水俣駅に集積し汽車で三角駅に送った。
- ・航空廠跡地には、水俣町役場が転居させた生活保護世帯など新たな移住者が住んだ。航空廠跡地に住んでいた元住人4人の証言と、「水俣地図(1960)」を照らし合わせると、「3カ所の航空廠跡地に、おおよそ15世帯」が住んでいたことがわかった。航空廠跡地前の海岸のカキの斃死(へいし)率は50%で、早い段階で発病した理由ともいえる。

2) 漁業の変遷

- ・茂道を含む袋村は、農業を生業とする村。
- ・細川藩第9代藩主細川重賢の時代に、ロウの原料となる櫛の殖産が奨励され、イワシを使用した金肥を用意するため袋村に漁業が導入。
- ・天保年間(1830 - 44) : 袋村の12軒が、袋湾でいわしや雑魚の地曳網を始めた袋村。
- ・明治時代 : 袋村から地引き網を買い受け、茂道で8張、湯堂で4張が独自の網代を設定した。
- ・明治中期～大正 : 大羽(おおば)イワシ刺網。
- ・昭和初期 : 網元は8張。
- ・昭和20～30年頃 : 「いわし網」の網元が4統。網子は約30人。「いわし網」とは別に、「アジかし網」「クロイオかし網」「流し網」「刺網」「ボラ籠」「タコツボ」などを専門とする、2～3人単位の小規模な個人操業者がいた。茂道は親戚同士のつながりが強く、網元と網子関係は親族である場合が多い。互いに協力して作業を行う漁業形態のあり方は、住民相互の日々の生活意識にも深くかかわっていた。



1952(昭和27)年頃。
水俣市茂道。
右は伝馬船。
左は動力船。親戚や近所の人から
もらった大漁旗をつけて記念撮影。
茂道住民から提供。(右下)

出典)
桑原史成『水俣 終わりになき30年』
径書房、1986年。
1960(昭和35)年夏。
水俣市茂道。(左上)



昭和20～30年代、ある漁師の食卓の様子

○朝食：麦・カライモ飯（米は少し）、魚の味噌汁、大根漬け物

○昼食：カライモ、漬物（食べる暇なく、ほとんど食べていない）

○夕食：麦・粟・カライモ飯（米は少し）

・アジ（味噌汁、煮つけ、刺身）、タチ（刺身、唐揚げ、煮つけ、味噌汁）、カタクチイワシ（タレソは生、小さいのは湯がいてイリコ）、キス（刺身）、ボラ（刺身と味噌汁、煮つけ）、カマス（煮つけか塩焼き）、カレイ（塩を振って唐揚げ）、ガラカブ（唐揚げにして骨も食べる）、ナマズ（砂糖醤油をつけてかば焼き）、カキ（味噌汁）、ビナ（塩ゆで）、シャコ（塩ゆで。脳みそが美味しい）、イカ（刺身、炊く）、タコ（塩ゆでして酢味噌）、海老（炊く）、ナマコ（薄く切った後洗って生で酢醤油）、アワビ（囲炉裏に乗せて焼く）、トリ貝（身は売り、ヒモを食べていた）、ハモ（湯がいて酢味噌）

・卵、豆腐。野菜は貴重品だった。

※鶏肉、豚肉、牛肉は入手困難で、食べる機会はなかった。

3) 顕在化した被害

○異変は、昭和20年代半ばから現れた(聞き取り調査より)

- ・海難事故(運動失調、求心性視野狭窄、平衡機能障害などの影響?)
- ・百間排水口で海底に潜る作業を行った漁師の皮膚が水膨れのようになり、「体が焼ける」と言いながら亡くなった(チツソ廃液の影響?)

○飼猫や養豚の狂死

- ・昭和25年頃:「猫が死んでしまって、家ねずみが増えて困る(石本寅重)」
- ・昭和26年～昭和33年頃:「養豚の異変と死亡(聞き取り調査より)」
- ・昭和30年代:「流産や死産を経験する女性(聞き取り調査より)」
- ・昭和31～32年:「わかっただけで幼児5名が死亡(聞き取り調査より)」
- ・昭和31年5月:「航空廠跡地の住人・湊上洋子氏(2)が水俣病発病(熊本大学医学部水俣病研究班『水俣病』1966)」
- ・昭和33年8月4日:「航空廠跡地の住人・生駒秀夫氏(15)が水俣病発病(熊本大学医学部水俣病研究班『水俣病』1966)」

茂道漁協組合員毛髪水銀量50ppm以上検出者と水俣病認定状況

氏名	性別	生業	年代 (S36現在)	S36 毛髪水銀量 水俣市衛生課 (S38.1.10送付)	受付年	認定年
A	男	漁師(個人操業)	40代	172.0ppm	S47	S48
B	男	漁師(網子)	50代	114.0ppm	S47	S48
C	男	漁師(網元)	50代	102.5ppm		S36
D	男	漁師(個人操業)	20代	100.0ppm	S45	S46
E	男	漁師(網元)	40代	96.7ppm	S48	S48
F	男	漁師(個人操業)	60代	82.9ppm	S47	S48
G	女	漁師の妻 本人は畑仕事	60代	87.0ppm(S36) 60.7ppm(S37)	S46	S46
H	男	漁師(個人操業)	30代	77.5ppm	S47	S48
I	男	漁師(網元)	50代	74.0ppm	S47	S49
J	男	漁師(個人操業)	20代	72.5ppm	S48	S52
K	男	漁師(個人操業)	50代	68.1ppm	申請前に死亡	
L	男	漁師(個人操業)	30代	66.0ppm	S47	S48
M	男	漁師(個人操業)	50代	64.5ppm	S47	S48
N	男	漁師(網子)	不明	62.5ppm	申請前に死亡	
O	男	漁師(網子)	50代	56.4ppm	S47	S48
P	男	漁師(網元)	50代	54.2ppm	S48	S50
Q	男	漁師(網子)	60代	54.0ppm	S44	S45
R	男	漁師(網子)	30代	52.0ppm	S48	S52
S	男	漁師	不明	50.5ppm	申請前に死亡	

出典)水俣市衛生課「毛髪中の水銀量検出結果について」、聞き取り調査結果

今後の課題

- 昭和32～39年に水俣市漁協による漁獲自主規制が行われた時、茂道沖は自主規制の区域外であった。そのため昭和34年に魚介類が売れなくなった以降も、住民は自家用に魚介類を獲り食べ続けたのである。このことで被害はさらに拡大していった。昭和40年代以降については引き続き調査を進めて行く。
- 日常生活上の被害について検証する。飯島(1984)が指摘したように日常生活機能が低下すると、家族内の役割に変化が出る。生業を失い家族や本人が発病し介護に追われるなど、結果的に、人生において選択肢を狭められること自体も被害ととらえ枠組みを作る。
- 住民が経験して語ってくれた、ひとつひとつの話は水俣病の教訓であり、これらを集めて検証することが話を聞いた者の役割だろうと考えている。